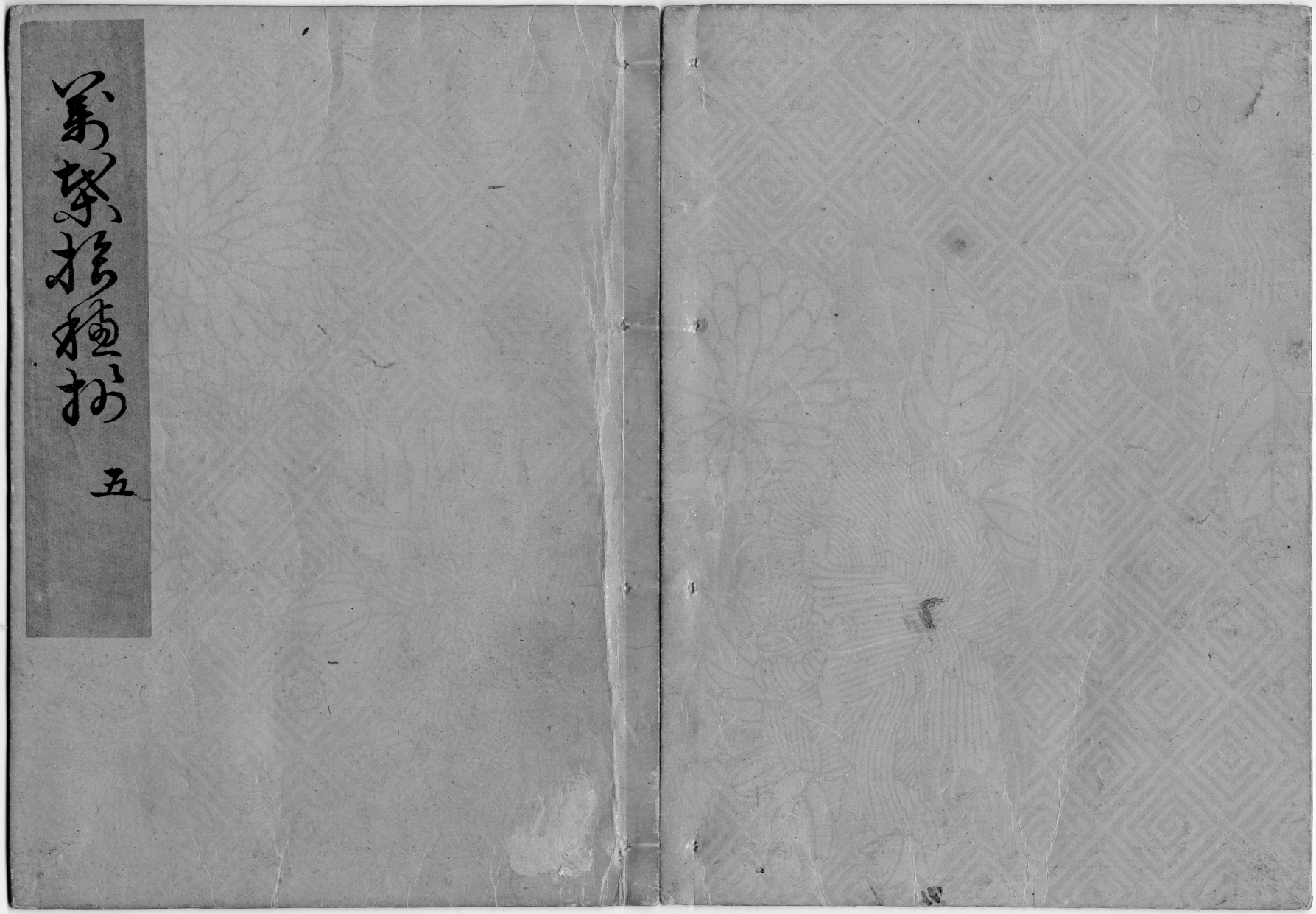

第柔指南
五

萬葉集巻第五

雑歌

神龜五年六月二十三日報二山問一

歌一首　太宰帥大伴卿

禍故重畳山問累集永懐崩心之
悲獨流斷腸之泣但依二君大一伴
傾命纔繼耳筆不盡言古今所
歎　奈可波　余能　伊余與麻須　萬須加奈之　可利家理

報山問 梹人ノ
家乃山事ヲ或人
吊ヒ一ハ云ヒ報乃
哥也大伴卿ハ云
梹人ノ也

禍故わさいのもの
重疊かさなりもの
累集のさまりぬる
也崩心斷腸ハ皆
ひさしきこころ
両君大助　おほすけ
ここに大助ハ吊ひ
歎くものをいふ
傾命已ハ老ノ名

筆不盡言　筆ハ尓ハえいひつくさゝることを云
よれるくハむなしきなり　泊世ハとまれる
梹人ノ人ハ主ノ
心經ニ有空無空畢竟空ヲ
同年　憶良ノ七ノ娘の挽哥ノ
蓋聞　挽哥の序也或本ニ

同年七月二十一日挽歌一首并短歌

筑前守山上臣憶良

蓋聞四生起滅方夢皆空三界漂流喩
環不息所以維摩大士在二于方丈一有懐
染疾之患釋迦能仁坐二於双林一無免泥
洹之苦故知二聖至極不能拂力負之
尋至二三千世界一誰能逃黒闇之捜来二
鼠競走而度目一之鳥且飛四蛇並侵

四生　胎卵湿化をいふ
般若經ニ曰有四種生一ハ因緣
生者謂人及畜生ノ
胎生ニハ寒熱和合生
者謂蟲蛾蚤虱ノ湿生
者三ハ化生者謂天及地
獄四ハ卵生者謂飛鳥

魚鼈法苑珠林　　而過隙之駒夕走

起滅　生と死と

三界漂流　三界とは欲界色界無色界是也瑜伽論并婆娑論ホニ委
環不息　三界より流轉とは生れては死ぬるを云ふ

維摩　維摩經よあり大士とは瑜伽論に有大心大行名大士とこゝに
懷染疾之患　維摩經問疾品よ釋ある文殊ゝて維摩の疾ひを問ひ
釋迦能仁　釋迦は梵語也能仁と飜釋也名義集ホに委

樹林枯ると滅の下也　泥洹は梵語滅度と釋ス泥洹經ホに
二聖　維摩と釋ゝを　至極とは道德ゝり極りて貴き人
カ負　死するを莊子大宗師篇曰藏舟於壑藏山於澤謂之固
矣然夜半有力者負之而走也とあるを引ゝ死と力負とゝ云
三千世界　長阿含經曰四洲地心即須彌山也此山有八山遶外有大鐵圍山
周迴圍繞并一日月晝夜回轉照四天下名一國土積一千國土名
小千世界積千箇小界名中千世界積一千中千界名大千界以三積故名一
黒闇これを死をゝ

二鼠競走　昼夜日月のとあるを經ホに日日のねすみ尋もともあるを准ゝ知ゝ
度同之名　そし同おとあるを老死ゝをさす　晝夜經ホに人乃老死ゝをさす
四蛇毒役　涅槃經二十四曰四大毒蛇盛之一筴令人養飴膳視卧起
若一蛇生嗔恚者我當進法戮之都市　弘決一妙樂大師釋曰四大
成身如一筴一大不調能令犯重故謂都市　仙地水火風之四蛇譬
過隙之駒　そし人生乃ちとあるを引ゝ序ゝ
山本ゝそとあり今多くあるを引ゝ出ゝ

紅顔　うたてき顔
三從　女人ハ幼ては父
小法ゝい嫁ては夫
にしたがひ夫死ては
子にしたがふをゝ三從
とりゝ儀礼ホに
素質とあるを引ゝ

嗟乎痛哉　紅顔共三從長逝素質與
四德永滅　何圖借老遷於要期獨飛
生於半路　蘭室屏風徒張斷腸之哀
彌痛枕頭　明鏡空懸涕鈐之淚逾落

罪德周礼註言詞令德ハ
身頽功務麻容婉娩
惜老遑朽要期　生テ
ハ老トモ小セムコノ
期ノコトヲ
惜老ハ毛詩乃句
獨飛　比翼乃鳥ノ
蘭室屏風徒張　国乃
深筠之涙　血涙ヤミ
愛河波浪　恩愛ノ浪
苦海　十悪乃俳
世乃生老病死苦　愛別離苦　所欲悩
従来厭離　トトモニ
泉門一掩無由再見嗚呼哀哉
愛河波浪已先滅苦海煩悩永無結
従来厭離此穢土本願託生彼浄刹

蓮託生ヲネカヒ心厭離穢土勤求浄土乃心厭離ハトイフトモ
生ハヨセウトモセヌ浄刹ハ浄土
日本挽歌一首
日本挽歌　愛河波浪乃
カヽルヲ歎シテヤマ
ヌレヒツサヽヌ
彼頃ヨキ本ニ成初シ
コトヲノミヲ　筑紫
ヲ遠ヲヽ王ヲ
ハヲヲ勢庭ニヲシ
ヲヲヌイ筑紫ノ袍袖
ヲヽニヲヌ　ヲヽ
ヽ袍袖　憶良筑前
守ニテヲヽ時ニ安
京ヲヽヲヽ
ヲヽヲヽヲヽヲヽ

大王能等保乃朝廷等斯良農比
おほきみのとのみかどとしらのひ
筑紫國尓子那須斯久比
つくしのくににこなすしくひ
伊蚊陀尓母伊摩陀夜周
いかだにもいまだよす
枳摩斯提伊摩陀阿良牟婆
きましていまだあらむば
米受年月母伊摩陀阿良牟婆
めすとしつきもいまだあらむば
許々呂由母於母波受阿比陀尓宇知
ここゆもおもはずあひだに
那毗枳許夜斯努礼伊波牟須弊世武須弊
なびきこやしぬれいはむすべせむすべ
カ比佐氣斯良受
いへなるはかりそうめさ
伊弊那良婆迦多知波阿良牟乎宇良賣斯政
いへなればかたちはあらむをうらめし

伊毛乃 美許等能 阿礼乎婆母 伊可尓加世與
いもの みことの あれをばも いかにかせよ
等可 尓保鳥 能 布多利那良比為 加多
とか にほとり の ふたりならひ かた
良比 斯 許呂曽牟跋久 伊摩須
らひ しか ころそむばく いまする
心うもきて
こころもきて

伊可尓加世武 世武須便乃 奈家婆
いかにかせむ せむすべの なけれは
阿礼乎婆母 伊可尓加世與
あれをばも いかにかせよ

右遺集ニ載ル所ノ歌ハ大津皇子ノ被死給ヒシ時ニ
ヨメルナリ

反歌

伊弊尓由伎弖 伊可尓可母 阿我世武 摩久良豆久
いへにゆきて いかにかも あかせむ まくらつく

都摩夜 佐夫斯 久 於毛保由倍斯 母
つまや さふし く おもほゆへし も

伴之 伎與之 加久乃未可良尓 之多比已之
ともし きよし かくのみから に したひこし

伊毛我 已許呂乃 須別毛 須別那尓
いもか こころの すへも すへなに

阿乎尓與斯 久夜 斯可母
あをによし くや しかも

大野山紀利多知和多流 和何那宜久
おほのやまきりたち わたる わかなけく

於伎蘇 可是 紀利
おきそ かせ きり

伊毛
いも

都摩夜 佐夫斯 久 於毛保由倍斯 母
つまや さふし く おもほゆへし も

久奴知許等其等 阿布知
くぬちこと ことに あふち

大野山紀利多知和多流 和何那宜久
おほのやまきりたち わたる わかなけく

於伎蘇 可是 紀利
おきそ かせ きり

右ノ歌ハ妻ノ家ヲ妻屋ニ云ヒ一書ニ云フ
ハ妻ノ家ヲ離レテ黄泉ニ去ルトイヘルニ
依テ書ス云々

妻ノ家ヲ離レテ黄泉ニ去ルトイヘルニ依テ
ナリ

端清也 嚢叡之須也 日本紀釋云
ハシキヨシ ナツカシ

乃経令 哭之
ノヘカケ ナケキ

悔寸哉 乎
クヤシキカナ ヲ

反惑歌一首并序并短歌

山上臣憶良

或有人
人或知有父母忘於孝養不顧人倫
軽於脱屣自稱離俗先生意氣雖揚
青雲之上心志猶在塵泥之中未験修
行得道之聖蓋是亡命之民也所以
指示三徳更開五教遺之以歌令反
其惑歌曰

俗皆貴之此高潔之人
視之如草芥脱屣而
言軽也

意氣雖揚青雲之上
心志猶在塵泥之中

身體猶在塵俗之中心有懸
人倫之道未遂超俗之志
未験修行得道之聖聖人乃
亡命之民不貴乃祖之
示三徳一曰二曰君臣父子夫婦有別長幼有序
五教　眞書尊典曰敬敷五教註父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序
朋友有信以五者當然之理而為教令也
紀憐愛　八年冬十一月日本
詞林采葉云　父母
婆　米具斯　宇都久志
遵路得奴　兄

のりろえぬ　道路得奴之
おやきのくれ捨りゝきこ
きそへそけみ　老幼也
ころきらの　けらへこい
りん枕頂しゝもふ八助字
也かりとおもしありへいまと
いふ心し親春子兄弟親
族老若朋友なとゝ同
りうしおもし世の道理
也いくかもしありへしと
うきことをねきつるらく
彼文選乃詞を用ひて
離俗先生考子親
族とすへしきを云
ゆちみ人ハ世云人也
親族を屣を脱る

弟　親族
かへりし　のりろえぬ　道路得奴　老見幼見　かへりみそけみ
朋友乃　言問　交　余能奈迦波
こともまれ　ことゝひかりし　よれなりく
加久叙　許等和理　母智騰利乃　可可良波之母與
かしうそとゝりしもちろの　くらへりしよ
宇既具都遠奴伎都流其等久　布義奴伎提
うきことをぬきつるらく　かみぬきて
由久智布比等波伊波紀欲利　奈利提志比等迦
ゆくちふ人ハ岩木より　なりてし人り
名能良佐祢　阿米邇由迦婆　奈何麻尓ゝゝ
なのらさね　あめへゆかし　なにかにく
都智奈良婆　大王　伊摩周　許能提羅周
けちならハ　おほきみいます　このてらす
日月能　斯多波阿麻久毛能　牟迦夫周
日月乃　したハあまくものむかふす
伎波美　多尓具久能　佐和多流伎波美
きはみ　たにくゝの　さわたるきはみ
跂許斯遠周　久尓能麻保良叙　可尓
きこしをす　くにのまほらそ　かに

斯可尓波阿羅慈迦
かくにハおもしつかりさりたし
迦久尓　保志伎　麻尓ゝゝ
こゝろ捨てゆきぬ人
ハ岩木より生れし人か
こし父母をなくて生れし人かとのゝ心ありては人乃おもふ生乃事とし
なのらさね　イ本奈何名能良佐祢とあり　岩木より生れし人か汝かりなのまゝと
但此本とハ奈何乃二字なし　なをさを可なり　なのらさねハ名のれと
ゆめへゆかはおもふまにゝ　義天ニ飛行きて　はかしにくはすハ汝かまゝとし
けちならハおほきみいます　天にゆかハおもふまゝ　此地にありてハ天子のおほり
よし日月乃照をてらす下　四乃むかひをり乃限るきハめに天子のきこしめ
す国乃ならしきはなれハ　父母妻子等を捨てかくハかゝにふへからすとさとす
むかふす　仙日むかひふすし　只向ふしきふる八極まれと限と同
こふて　仙日谷あくハ谷をこれハ云し　羽林日　きこしをす
国乃まほら　国乃まほりしちるくきこしめす也　但日本紀景行天皇の
法哥ニやまとハくにのまほらと　ある八釋日本紀に　多の腸の倍羅
相ニすまハ真迦言ハ多の腸の相乃如く　おほひくすふし大和ハ奥區の也
也麻袁多也といへる八別義り　ほむるといひ　これハ我の巻より
り其心を捨て俗を離るへからすとし　あやうし

さいはひ ありさま 幸 ことに 後 離俗先生 ことに 深く 惑 てを いさめ ことと 思ひ

反歌

仙宮 なる 人 は 天の原 ふりさけ 見れば 春日 なる 三笠 の山に 出でし 月かも

比佐迦多能 阿麻遅波等保斯 奈保等々尓 比佐迦多能 都紀波伊弊尓 伊弊尓可藝利提 奈利平 斯麻佐尓 伊弊奈加利提 奈保等々尓

思子歌一首并短歌

山上臣憶良

釋迦如来 金口正説 等思衆生 如羅睺羅 又愛無過子 至極大 聖尚有愛子之心況乎世間蒼生誰不愛子乎

本小注子 金口とは 佛言を貴て 金口と いふ

等思衆生 これ 涅槃経 鳥喩品の文 但視衆生とあり

うつせみも 妻を 食ふ 鳥も 子を 持ちて 子ゆゑに 思ふ

うつせみの 人 の 子を 思ふ

銀母 金母 玉母 奈尓世武尓 麻奈波之母 母等奈可可利提 夜周伊斯奈佐農 伊麻之 波米 古尓 斯農波由 久利 物能曽 麻奈迦比尓 母等奈可可利提 夜周伊斯奈佐農 伊麻之 波米 古尓 斯農波由 久利

反歌

銀も 金も 玉も 何せむに まされる 宝 子に しかめやも

多可良 古尓

同年七月二十一日世間難住歌一首
并短歌并序　嘉摩郡ヲ撰定之ヲ

山上臣憶良

哀世間難住所以因作一章之歌ヲ以撥ニ二毛之歎其歌曰

世間　周撃奈伎　物能　半月
よのなれ　あきさるのこと　多夫と
等　利都々伎
おもへ　ことにしあれば　とりつなき
佐備　周等
おとめさびすと　叫び
麻可志
をとこにあれや　ももとせを乃

哀世間難住　以序異本云集難排八大辛苦難遂抛盡百年賞樂古人所歎今示及之所以因之也　八大辛苦云々人間乃八苦乎云々

二毛之歎　文選潘安仁秋興賦序曰余春秋三十有二始見二毛註二毛髮始有二白毛一也

又選云逝者如流水ノ云々是也

年緒ヲ追事ニ拍ハ百
変乃多加せめ
ことにしあれば
乃結ヲ老来之後用
おとめ
本朝月令五節乃事
ヲ吉野山乃神女ノ舞謡
乃詞ヲ
けるかもしれず
芳國ヲ
叫び
自然乃神乃
赤裳
妻木乃
よろこぶ　仙宮等拾

袖布利　可伴之
袖かたしき　それをのみ　阿可毛
ひさよもちこてらさりく
等ゝ尾迦
のうひんとやさりをそ
祢　周具斯野　利都礼　和多迦具
ねすくも　ひとりかも　義奈乃
漏伎可義尓　伊都乃麻可
いつのまさきも　かもりくん
伊豆久由可
おのてりくよ
恵麻比
ふるまひ　かもりくん
麻欲毘伎　散久伴奈
ましひさ乃　うつろひなりく
都流伎多智
おとこさびすと

乃子等といふ也 玉東
らてなれいそゆる也
すぐしやりつれといふ義
とゝめかねつれといふ也
みなのわた 蜷と云貝の
腸黒き故玉の枕詞に
かゝるといふ 詞林云外
發語に玉東いふの古義
これいつのまたにし
紅粉をよそひし也 紅
介能保奈酒 ふのをなす 丹の穂成也
とこあかり白し也 紅顔に
いてゆり そゝがるゝ
黒髪白く紅顔老くの
よりきたりしをいふ
也ねをふしいふ これるか

さつゆみを　たにぎり持て
あかごまに　しづくらうちおき　はひのり（佐都由表　志都久良）
て　あそびあるきし　よのなかや（阿蘇比阿留伎斯）
つねなりける　をとめらが　さなす板戸を（佐那周）
をしひらき　伊たどりよりて　またまでの（伊多度利與利提）
たまでさしかへ　さねしよの　いくだもあ
らねば　たつかづゑ　こしにたがねて（多都可豆慧　多何祢提）
かくゆけば　人にいとはえ　かくゆけば（可久由既婆）
人ににくまえ　およしをは　かくのみな
らし　たまきはる　いのちをしけど

くのことありしといふそ
ありけりてれ　せんすべもなし
をよひよよひき 笑眉引也 たれはねよりし 花の様なごとく さかりわ
そのしし 花はえ今のあゆりしいふのにれよりも今の笑の眉はようにいはれ
ますかろ乃をとこさびすとと おろかをとめのかほざいもさといふなり
又いき 女もいつゝ 紅顔の表をめでるに そゝめけそいたり 男のみるいさこ
引との哀しむ 美髪 みつをやりて 人やしきをいへ 云 遠
さひらと さかみ乃 ねらこし　こぶさわらら 又安云くに 極搗し
ありこまに 仙口赤き毛乃馬也 志りくいは志りとは下とりいふなれはよく
ここちなどいふ 今は仙行 又安云 志つくうちおき 志つくは鞍 重くこゝなり
さなすいたと 又云 板戸をなるすゝ 玉東さは助語也 なるよ 板戸を
いたどりよりて 仙口 さゞりよりて といふ義也 玉東 良見よおこ くらや
またまでの たまでしの まてさしかへ 仙口よせてといふ 玉衣 玉とこゝのまてと
又安云 まくらの玉のやうなる手也といふ 玉東 またまでの玉は 美称に
行く つかはれたりしと いふこと也 玉のいくだもとあまりもあらず 案しとく 久といつとも 工と通
又たつかつゑ 腰にしておそて 仙口 杖につき つゝえ 腰をたがねて

ゆきゝ人なみ〳〵なれや我のみやかくも恋ひわたる
ゆき〳〵て逢ふべきものを小夜ふけて傾く月に嘆くこのころ
右二首傳云件本不注姓名但聞所伝之時
人皆以為仙柱所謌也

反歌

迦久斯母何毛等　等登尾

ときさかるすべしこれをと云ふことよしと云ふものを

相聞歌二首

大宰帥大伴卿

伏辱来書具承芳旨忽成隔漢

隔漢之戀　漢ハ天河
やは女天漢を隔て
あふ女〻雖然猶有
戀慕之意　荘子ニ尾
生ノ人ニ於ク梁ニ
待ヨ大水ニ而抱ク柱ヲ
梁而死大伴淡ノ我
待ンヲトイフ心歟

待披雲耳　披雲トハ
待ヨ雲ノ開ヲ
隔漢之戀ニ一首尾ヨ披雲トハ呂望ノ文王ニ
遇ヒ炳然トシテ如披雲見日ト徐幹中論ニ有リ
仙曰一ツノ中ニ於テ
離名　善註曰周礼ニ曰凡馬八尺已上為龍
うけ〳〵ふ〳〵ゆゑ〳〵

抱梁之意　唯淡去留
無恙遂待披雲耳
多都能馬母伊麻勿愛弖氏之可阿遠尓與志
古乃乎母伊麻太見弖乃知乎須良
右一首
伊昧

よしゑやしうけ〳〵ふ〳〵ゆゑ〳〵

答歌二首　大伴淡

大伴淡等謹状梧桐日本琴一面對馬之結石山孫枝也此琴夢化娘子曰余託根遥嶋之崇巒晞幹九陽之休光長帯烟霞逍遥山川之阿遠望風波出入之雁木之間唯恐百年之後空朽溝壑偶遭良匠散爲小琴不顧賤質猥音少恒希君子尤琴即歌曰

伊可尓安良武日能等伎尓可毋許慧之良武比等能比射乃倍和我麻久良世武

僕敷歌詠曰

許等々波奴樹尓波安里等母守流波之吉佐美我手奈礼能許等尓之安流倍志

琴娘子答曰敬奉徳音幸甚幸甚

琴賦曰惟梧之所生兮託峻嶽之崇岡崇巒多峭兮晞幹九陽之休光

文選註銑曰孫枝側生枝也

余託根遥嶋之崇巒文選嵇康琴賦曰且晞幹於九陽

註九陽數也陽日也

同賦曰吸日月之休光

註休美也

よりさきとりふるまひ

逍遥　優遊自在貌

出入雁木之間　仙曰莊子曰子呈子問莊子昨日山中木以不材得其終天年今主人雁以不材死矣先生将何處莊子笑曰周特處彼之

聞キ與不ヤ二門似テ之而非也故未免平累ニ今琴娘子ろうこそハヤとをきその同う處平こ唯恐百年之後死ほとゝぎす何ぞ拘ゝんはむるく谷風小指んことを思ふまて西京ふ不顧貧賤音少ゝ早下乃絃しなるく音すくなきを口のすさひ恒希君子左琴ゑのかり乃琴とちんんをこれねふとゝいふ所人目乃こさゝこゝちんとハ知音とて琴小出ける伯戎鍾子期りきるゝ仙曰いとの〳〵ひさかうつゝこゝろねまふハこゝろねまと拘ふこれ牧笛のまこゝろ心中ハ後ま語向一名根まのこゝろとゝいふを同一心ゑハ拘ふこれ相るくくあやしさなりとしゆるまてくうくきいと

片時覺即感於夢ノ言慨然不得默止故附公使謹以進御耳不具謹狀

天平元年十月七日

謹通　中衛高明閣下

乃ま可ふ引ぬ一ゝとゝしきれのこゝハくまる引る琴敬承德音功德乃こゝろ山郭詠をうやまひくふ引る片時覺やうく心ゑさまりとゝ慨然慨玉篇ニ大息也るくくとゝりこもよも琴娘子乃引ことにくく進上ゑとゝ不具乃くゝ心ゝ

附公使　き子の使りことにくく進上ゑとゝ不具乃くゝ心ゝ中衛今乃近衛ゝ聖武帝乃天平ゑ中小中衛ゑの平城帝乃大同二年ゑ勅ゑく中衛を以大近衛とすゝ磯原ゑ高明ハ敬乃跪承芳音芳蘭の如嘉懽交深ゝ嘉ハ善也懽ハ悦也芳ゑ乃くゝちをゑきこゝろゑ深ゝこゝろ心ゝりくゝ龍門之恩後漢の李膺ゑ容接せくゝ士を登龍門と号

答書并歌一首

中衛大將藤原卿

謹言跪承芳音嘉懽交深乃知龍門之恩復厚蓬身之上戀望殊念常心百倍謹和白雲之什以奏野鄙之歌房前謹狀

せうもせん今
労者とうもう妻層
うゆきあるごくなる
まいれ門乃悪後原
こうつや
蓬身 ひとびとそ
つうく菊子曰蓬生
麻中ニ不扶自直 我ゐれく容接せうあ〳〵蓬乃麻のやまはまう
うううくこうつやく蓬ゐこひふやく又蓬心乃ゐとうふやも
戀望殊念 よれあり野ゐせありきこひ日比り百倍せりこと
白雲之什 什ニうこうをろ 司馬相如大人賦ニ登せ帝行
後して有凌雲之氣この雲うう前漢書ゟ称ゐをうめて白
雲乃行こうろう野鄙之歌いやきうこと房前いさきと云
こうねあいおり わせこい大伴淡をうあ〳〵今とい佐保之
けちふをめてやいとうふ小川一地乃ゐろ
十月八日イ本ゟ下ふ附ス遣使大監ニこうり大監ハ大宰大監こうゐ人ニ今

遣使ニうる中衛大将の時ゟ附スべきことにあらず
謹通ス尊門記室ニ
そる門ニハきをうと
む沼し記室ニ書記
ちまちうつまく真ふ
うを悼りて記室ま
てをうつのゟり
事物紀元曰漢書百官
志曰王公大将軍幕府モ
皆有記室掌章奏書記ノ
鎮懐石懐胎をちつめ
おさもるる序り
ううり
怡土郡 日本紀ニハ伊
都郡こうり

詠鎮懐石歌一首并短歌并序
那珂郡伊知郷巣鳩
建部牛麻呂傳ニうる

山上臣憶良

筑前國怡土郡深江村子負原
臨海丘上有二石大者長一尺
二寸六分圍一尺八寸六分重
十八斤五兩小者長一尺一寸
圍一尺八寸重十六斤十兩並
皆墮圓狀如鶏子其美好者不

有二石一くみ玉そし
墮圓狀如鷄子 まろくして色わ玉子のごとし
息長足日女命
神功皇后乃御事なり
日本紀九曰 于時也適
當皇后之開胎 皇后
則取石挿腰而祈之
曰事竟還日産於茲
土 其石今在于伊都
縣道邊
かしこし
畏可畏之 畏き也
かしこきこと貴む也
かみのみこと 足姫を貴ミ
て神の命といふ也

可勝論所謂徑尺壁是也 去深
江驛家二十許里 近在路頭 公
私往來 莫不下馬跪拜 古老相
傳曰 往昔息長足日女命征討
新羅國之時 用茲兩石 挿著袖
中 以為鎮懐 所以行人敬拜此
石 乃作歌曰 或云 此二石者 肥
前彼杵郡平敷之
石 當古
而取之

口かけまくは あやにかしこし たらしひめ
　阿夜尓　可良久尓
　多良志比
　武氣
咩かみのみことの からくにを むけ

表筒男中筒男底筒
男乃神語に任せ
て三韓を平けたまふ
る也 只足姫と云也
かしこし 韓國也 三
韓也 仙曰新羅也
むけたひらげ 日本紀
には平むけとよめり
いはひたまひ 帝頌
しつめたまふと
こゝろして
いとらして 仙曰 いのり
石をとりて 祝ひたまひし
またまなす ふたつの
ふたつの玉

ひらげて みこころを しづめたまふと
伊刀良斯弖
いとらして いはひたまひし またまなす
世人尓
ふたつの石を 世の人に しめしたまひて
余呂豆余尓 伊比都具可祢等
よろづよに いひつぐかねと わたのそこ
意枳都布可延乃 宇奈可美乃 故布乃
おきつふかえの うなかみの こふの
波良
はらに みてづから おかしたまひて
可武奈可良 可武佐備
かむながら かむさびいます くしみたま
伊麻能遠都豆尓 多布刀伎呂可舞
いまのをつつに たふときろかも

反歌
阿米都知能 等母尓比佐斯久 伊比都夏等
あめつちの ともにひさしく いひつげと

ゆいはくねこ万世ま てこひはげとて子負

このくしみたまかしこし

許能久斯美多麻志可志家良斯

あまはつくしをせのふとこ かまりふうに 兄安云おきつハ枕詞 ふかえの こふのハ名所也 うなかみのこふの 兄安云うなかみハ海上也 みのりハ原也 みてつからとりて 御手つから置せ給ひてといふ義也 かんながら 神ながらハ神異なりとの心也 かみさひいます 仙覚云神さひハ神の如くなり 予案奇 くしみたま 御霊也 兄安云二石の名也 いまのをつつに 兄安云今の現也 たふときろかも ろハ助字也 日本紀に かしこきろかもとも有り あめつちのむたに 天地とともに 万世までいひつたへけむ とこしへにいはひまつらんとの義也 八宅が云此石ハ神功皇后の新羅を討給ひし時 二の石を御裳の腰にさしはさみ給ひて 誕生を延し給ひし件の石をさしていふ 予案 かくのことくもあるべし 又云

宴大宰帥大伴卿宅梅花歌三

十二首并序

天平二年正月十三日萃于師老之宅申宴會也時初春令月氣淑風和梅披鏡前之粉蘭薫珮後之香加以曙嶺移雲松掛羅而傾蓋夕岫結霧鳥封縠而迷林庭舞新蝶空歸故雁於是蓋天坐地促膝飛觴忘言一室之裏開衿煙霞之外淡然自放快然自足若非翰苑何以攄情請紀落梅之篇古今夫

師老 旅人卿也

氣淑風和 淑氣和風 皆春のさましき也

梅披鏡前之粉 梅のうつくしく咲しハ美人の鏡にむかひて紅粉をよそほふに似たるなり

蘭薫珮後之香 説文曰蘭香草也花常在春初 離騒曰紉秋蘭以為佩 蘭を佩とせしハ香のうしろよりかをる也 唐にハ蘭をさして云

松掛羅 雲のかゝりたるを松のうすものをかくるにたとふ

かけしやうしことし
玉策記云千歳松樹望而
視之有如偃蓋ノ蓋
夕陰 岫山有岩穴也
鷇 尒雅云須其母而食
謂之鷇
蓋天坐地 酒徳頌幕
天席地
忘言一室之裏 一室
乃うちは胸中乃
心を言ふの
ちまた世俗之
王義之
蘭亭記曰悟言一室之内以寄
開襟煙霞之外 文選采玉風賦曰王乃披襟而當
之曰快哉此風 淡然 仙曰さらり
と快然 仙曰こころ
よくさまを蘭亭 記ての

何異矣宜賦 園梅 聊成短詠

大貳 紀卿

むめさくころまつかうくいかに
為梅 多労之 岐乎倍米
うめをおりてかざしへめ

小貳小野大夫

為梅 期等
うめの花今日のあるじにしかめやも
和我覇 阿 利 己 世奴加毛
わくへのうのこせぬりと

非翰苑何以攄情 まこと小野にて心をのんやうなりと
むかしさこちもち乃 かくしこそのこゝろをのへ梅を折て
ふみ文をかきまへるとかや
ちんさいそんそくのきをつめとこゝろむ月のきさらき
うめの花ちるまてのこと 我家の苑にちりこせぬいと
こゝ今日のあるじ 萩の花咲てちりこせぬ

小貳粟田大夫 阿遠也 凝

うめの花ちるまてにおもふやまさい
可亜良 奈利尓家良 受疾
かうりすくなりかくすや

筑前守山上大夫

春されはまつさくやとの梅花
此等利 波流比 久良倍武 須
ちらくをやまたむ

豊後守大伴大夫

よのあけぼのにこそいさきよけれ（古飛鳥則宜志恵夜）

うめの花さくやこの里あるじから

筑後守葛井大丈（カト）

うめの花今さかりなりうぐひすも

かすかにさへぬ今さかりなり

笠沙彌（滿誓）

阿平夜奈義為梅等

うめをやどさき梅のえだをおりかざし

能弥氏

のみつくしてのちはちりぬともよし

主人

わがそのの梅の花ちる久方の

あまぎる雪かはなかとみまがふ

大監伴氏百代（ダイカンバンモモヨ）

うめの花ちらくはいつもすぎぬとも

知良久

紀能庭麻

この里のやもたにゆきはふりつつ

小監阿氏奥島（ショウカンアウジオキシマ）

梅の花をちらくもしみ我そのの

多氣

波也之

守具比須奈久母

ふりかけをやしてゐるものくもを

小監土氏百村（ショウカンドジ）

うめの花咲るその木柳をば

阿素比

久良佐奈

かたくなふきそ人のうしろさる

雪消（ケ）溪（タニ）もり

そこ清水ゆくりなくむすびつる

こしもしるしも

うめの花ちらくいつごとちらくに

こころしぬべきはるにもあるかな

いつもかもかくもあらむこの紀の山

いさとりもちてもてゆかば

梅の花ちるひさかたの雨

梅の花今咲る如（ごと）く

竹にも梅にもをよる也

うめの花咲る園

うぐひすの声も来（き）なくや

栗田女王（メオウ）

梅の花

大曲、史氏大原或作魚ニ也奈宜

うちなびく春の柳とわがやどの
烏梅 波太奈
梅とをいかにながめん

小典山氏若麻呂

波流佐礼婆許奴礼我久礼婆ことぬれりそてうくひす
志豆延
おきてくいねかる梅り志川えよ

大判事舟氏麻呂

比等期等尓
いこととにおりてうくひすつてあうへく
いやめつらしうめのくるうし

醫師張氏福子

梅の花ちりまかひたりあをやぎの
都伎氏 佐久良波奈利
いとにぬかまくほしくなりぬ

萬世 得之 波岐布

筑前、奴佐氏子首
奈利太加美

よろづたにうつしうゑたるうめの花
佐一吉
いつもかくもあらぬかもとも

宇倍母

壹岐守榎氏安麻呂
由キ 或板カミ

ちりまかひうせなむ梅の花
きみをおもはむわれもよしもな

神司荒氏稲布
カンツカサ アラ ナフキ

うめの花おりてかざせるひとの

大令史野氏宿奈麻呂（サクノフミノナ）

得志能波尓
うらゝかに春乃きたれハ
波流流加多
うめをゝりてこのくれまめ
能麻米

小令史田氏肥人（コ）

うめの花今さかりなり
古保志
こゝのこゝろきまさりけり

醫師高氏義通（母比止之）

波流流佐良濃
春のくるさまありとハ
うめの花
ゆきのふりおけるをもしる

陰陽師矢氏虫麿（イ）

梅乃花
おきつしもゆゑ
あやまちつゝも

等師（サウシ）志氏大道

奈都氣牟
春乃くるかと
和何
わかやとの
うめのはつ花

大隅目（オホスミノサクワン）榎氏鉢麻呂

平加肥尓波
梅花ちりまがひつゝ
波流加多麻氣
うぐひすのなく

花の日田氏真上（カミツケ）

ことしハさくらのはなと
梅乃花
おきつしもゆゑ
こゝろまどふも

春の野よりや
梅のはなれ
わかやとに
うぐひすのなく

梅花ちりかふ
見安
八重おそ
作設
梅のたちえ
ハるの

春乃野ゝ雲立わたる雪と
いとゞ乃久るまゝ梅乃花ちる
（紀理比得）

壹岐国村氏彼方（一平）

波流楊奈宜可豆良
多礼可有可倍志佗加豆岐能倍介
（波流楊奈宜可豆良）
（多礼可有可倍志佗加豆岐能倍介）
春乃柳ハ加つ加ゝ梅乃花
さりつゝきのへゝ

對馬目高氏光

於登
うぐひすの乃どを木くゝる梅のゝ
わきて乃ものゝさゝくゝちるゝ

薩摩目高氏海人（阿蘇比）

わりやとの乃れ雪つゝ小梅ゝ

おもふく営ゝ
とゝゝ

梅乃花おりゝ
（弥夜古之叙）
（毛布）
梅乃花おりゝ加ゝ
加ゝ

土師氏御通（ハジ）（ミユキ）

梅乃花おりゝ加ゝ
加ゝ

伊毛我陛迩由攴 小野氏國堅（久乃賀多）

許々陀毛
小梅のゝ

筑前掾門氏石足（ツカサ）（イソタリ）

麻知迦岐
（宇米我波奈）
梅り花
知良須阿利許曽
意母布故我多米
うぐひすの乃小せ
うぐひすの乃

小野氏淡理（八年）

那我岐波流早河謝数例

かくみつのあさいる月をかさせれと
伊野
いやおつるさうめのえだかも

後追和梅花歌四首（ラヒテ兄）　この四首イ本二思想ニ首乃至ノ下ニアリ

作者未詳

由棄　宇梅　半奈
のこりる雪ふきわけるうめのえを
由吉　雪ハけぬこと　波奈
そやくおもわろ雪ハけぬこと
有米
雪乃えをうくいてちるそ梅のも
必登
いまさらのなかろんとしも
和我夜度尓　尤加里
わくやこふさうりなさくる梅のも

為梅能　波奈　伊米尓加　多良久　美也備多流
うめのもと　いめにかくらくる
波奈等　阿倍　母布　尤氣尓于可倍　許曽
えたとなれ　酒をうくへこそ

一云いつくふりをちるすみ
さかりうくへこそ

思故郷歌二首

員外

和我佐可理　伊多久　久多　知牟　久毛尓得支
わりさりいつくもぬ雲ふとも
久須利　波武　等母　麻多　遠　知来也母
くすりそもとめやもまたをちこえて
久毛尓得支　久須利　波牟　用波　美也古弥波
雲ふとも　くすりそもよそ　みやこえて

心ゆきつくし
うめのえを見安云いめハ夢也意可
しくしくおもほゆるかも
也倍乃野乃
とのれるよとハ
る花と我ミるまて
いうつりさとり
雨麗　雨のふりかくす
うつくしき　葉酒を
わりさりいつくそ
八雲かそこもわのく
仙口ろぬハ斜の又

字をそゝちどよめいわくよりいとくみ　伊夜之吉　阿何徽麻多　越知奴倍之
いやちさあり多ちこおちぬへし
ねてよめる也雲ふかゝらんには仙菜也仙人のほかなる物と欲心おこりぬ是ハ通力うせておつるなれハ我盛りくたけれハ仙菜を服ちく通力をはなちまじわらんとよめる　五菜淮安王劉安仙菜を含ちく上天せしふち家乃鶏犬も餘菜をくらひて雲ふかく一ときほと乃空なくくれ仙人欲とおちて隣落せしを雲ふかゝらん菜心世ハ服菜也仙せ世ハ我俗骨なれハ都ハ放ちをよめるこゝろ欲生ちくゝ又ふかんこと
蓬客　山上憶良の作名とり説ある可ちくゝ
松浦乃ちま奥二妻と
此序ハ文選十九宋玉ク神女賦　曹子建ク洛神賦ちを乃附

遊松浦河贈答歌八首并序
蓬客
余以暫往松浦之縣逍遥聊臨玉島之潭遊覧忽値釣魚ヲ

を移して
花容無雙　洛神賦曰
華容婀娜　神女賦ニ
曰其葵無雙ト
開柳葉　眉乃みちなるをいふ
桃花　お赤をいふ
臨洛浦而徒羨二魚ヲ
唯性便水とゝろ心
仙曰王魚者王餘魚ニ
和名引朱崖記云南海有王餘魚昔越王作鱠不盡餘半棄水自以半身為魚故曰王餘已上俊材

女子等也花容無雙光儀無匹
開柳葉於眉中發桃花於頬上
意氣凌雲風流絶世僕問曰誰鄉誰家兒等若疑神仙者辛娘等皆咲荅曰兒等者漁父之舎兒草菴之微者無郷無家何足稱云唯性便水篶心樂山或臨洛浦而徒羨王魚乍卧巫峽以空望煙霞今以邂逅相遇貴客不勝感應輒陳鄙曲而令而後

豈可非倩老哉下官對曰唯唯敬
奉芳命時日落山西驪馬將去遂
申懐抱因贈詠歌曰
阿佐利 阿未 能古
乃左右須流 之良 延如
倩老 詩註曰言倩生而倩死也
唯唯 阿、ここらあることを 奉芳命 おほせことをうけたまはる
驪馬 馬深黒也 申懐抱 心中乃おもひをのぶること
乃左右須流あれ 乃さりいすることの娘子の漁父之舎兒
こういふよりてかくえ也、古事記ねこうまれしものこと
日本紀十五 君子とはてうまれしものことよめり、いかにも云そ、
神仙乃もの 又美人をうまれしともよめるふるき形据うもひとの

ことされ子とも
ゐるとされ世のよう
祇ねをやさしみそ
酔る哉
まうけ乃かくれ
ほの肌をりへ彼し女
乃形のうるはさ哉
くせるいと女をそ
いもいし女をそ
杉潤する玉湯川
いちしろくすと云
をやさしみれすとこ
るをとりて
とをち人まつの川
又安云遠人也事を
人をまつとうたひて

答歌 松浦娘
多麻之未能 許能可波乃波 伊迩波阿礼騰
ゐるとされ このかくれ乃いはいはれしと
吉 義 夜 佐 良波佐受 阿利 吉
きみをやさしみうけいさすなりけさ

更贈歌 蓬客
まつらかわのかせひりのゆつるも
多多 熟流
くせる いもりもれすくぬれぬ
杉潤する玉湯のあゆつるも
多麻世流 許能 之 知 之 須
等 富都比等 和可由 都流
とをつ人まつの川をわかゆつる
いもりもれこそありめ

更報歌　松浦娘

和可由都流

わかゆけるまつらのかはをみのひとも
女波婆
なくわれこひめやも

和伎覇

春されはわきへ乃里ゆくとりハ
加波度
阿由故　佐婆斯留吉　我麻知我低介
あゆこさりまつまつてよ

奈奈勢能興騰波

まつらのかはのかはなみのゝとハよるとも
わきへハよらすきみをしまたん

追和歌三首

帥老　大伴卿

まつらのかはの川なみのゝとハよるとも
此等未奈能　我良武
いとゝきみのこらんまつらの玉嶋を
美受　氏
見てやわきへハこひつゝをらん

ふるさとのまつらの川をわたりゆく
いもらをみつゝ人乃こひしき

七夕乃漢ハ夜くの
漸くのよそ心湖之
神功　石占
祇日松浦の小鮎釣すと
まつら川くたの瀬

皆人乃こひまつ松浦の玉嶋を我ハこすとも
まつら川なるの
いもかもとまくも

旅心をなくさめかねつゝ小鮎
也亜衆姉乃狭を我
こゝろよりめて花小妻
て我こそおもへとも
わかゆけるまつらの
若鮎釣之序毛なみ
みもりくとハるまく
もの
春されはわきへ乃里の
我家里ゆくさりしるし鮎
也こりゆこさりしるし鮎
子小走也こりゆのそるを
我乃妻もこそまつらねを
て立てふるまつらかも
うてよめる
まつら川なるせのとハ

帥大伴卿和歌四首

人歌書并歌四首

吉田連宜

宜啓伏奉四月六日賜書跪開封函
拝讀芳藻心神開朗似懐泰初之月
鄙懐除拂若披樂廣之天至若羈旅
邊城懐故舊而傷志手矣不倚憶平
生而落淚但達人安排君子無悶伏
冀朝宣懐瞿之化暮存放龜之術架
張趙於百代追松喬於千齡耳兼
奉笛示梅花芳席群英摘藻松浦
玉潭仙媛贈荅類杏壇各言之作
疑衛皐稅駕之篇耽讀吟諷感謝
歡抃宜戀主之誠誠逾犬馬仰德
之心心同葵藿而碧海分地白雲
隔天徒積傾延何慰勞緒孟秋膺
節伏願萬祐日新今因相撲部領
使付片紙啓不次

天平二年七月十日

和諸人梅花歌

をれゝまのこせすいみのふ乃
うめれそなふもまもりもあを

邊城懐故舊多經年月
年矣不停年月如流
達人安排莊子大宗師
篇安排而去註安其所
排隨造化而去
君子無閑
懐瞿之化　菱求後漢
魯恭有雉過止其傍曰化及鳥獸
放龜之術　毛寶白龜
菱求ま玉ゝ浦鳴の
子ゝなるゝ堂の四方や
張趙　二氏乃名
松喬　赤松王喬神仙傳

梅花芳席　おの世二首

仙媛　口の姫まのうら　　千良　越等賣

杏壇各言之作　莊子

雜篇漁父曰孔子遊緇帷之林休坐平杏壇之上弟子讀書孔子絃歌奏曲未半有漁父者下船而來下略

衡皐税駕　文選十九洛神賦曰税駕乎蘅皐註蘅皐香草之澤也

逾太馬同葵藿　文選廿七曹子建表曰臣伏以犬馬之誠不能動人又曰若葵藿之傾葉大陽雖不爲廻光然向之者誠也こゝハ戀心を王御徳心を云

碧海方知白雲隔天　猶おと海をへだてゝ天をまつごとく

徒積傾延　傾延ハカタブキヒクヒおひ葵藿のこゝろをうつして君をまつ事

こゝろにしるもとゝろも　何慰勞緒心　文選卅一謝靈運擬魏太子鄴中集詩序曰秋七月

萬祐日新　さわりなくよろこびまします心

因相撲部領使　万葉廿隅萬麻呂を初め数人相撲らも来りし

十月お撲部領使のつかさ　部領使ハ引率する人也書をやるとゝ

不次　膓次なきこと早乃詞

をれなくもかゞ思せすハ　心哥ハ乃字ハ衍文なるべし

志へやこと結ふ和ゝとるもの　心ハ我歟　をれなくハ　下句ハ帥老

乃陪園乃梅ニ成つゝ　梅をとらハ汝を我ものとせんと下句ハ同じて心ハこと

さ手をまつ松浦の　山哥ハ松浦姫乃七絶乃ごとくハよろしからす

君をそうらんこと　後ろ髪引ハ八雲抄ニこゝろ引ハ思ふ

ものから世界し仙家をもふ　すてゝこさるをもふ

思君未盡重題歌　　志良久毛

波漏ニヽ

香くふかしゝ彼西簡り　智弊仁遵多天留　都久紫能君仁波

白雲隔天こゝろ　　奈良遅

扨　美可由佐　氣那家久

志滿乃　已　太知　母　可牟佐備仁家理

與松浦歌書并歌三首

山上臣憶良

憶良誠惶頓首謹啓憶良聞方岳諸侯都督刺史並依典法巡行部下察其風俗意内多端口外難出謹以三首之鄙歌欲寫五藏之辭結其歌曰

佐宇流欲比 賣能故可比列布利斯

やまのみやまきつつをらん

刺史と称ふは都督已下太宰帥已上唐名也刺史は國司也典法は公の法令也巡行部下は部内を巡行するなり多端は心さだまらず故意内多端と云ふなり

五藏之辭結　胸中乃辭結を云ふ

まつらさよひめのこ　祇曰只佐欲比賣能古　松浦潟

ひれふる山は肩肥前に名るき山をもゆきてとすゆゑに一云ひれふるとさよひめと云ふ

多良志比賣

しひめ神乃みこのまつらさよ　弟多多志　世利斯　伊志

ひれをしみ　毛毛可斯　麻都良遣

ふりすはますもふりて　佐夜礼留

天平二年七月十一日

てんね於今を讀り
もゝかしもゆかぬ
仙曰もゝかと八百日也
さやれるとハさかれる
也愛素松浦路ハ百日
行あらぬ行すうちゆく
行すハ海こんをはふらく
清まて絲をひかせね
すとゝ

藩國 外国をいふ

日本紀十八宣化天皇云二年冬十月天皇以新羅寇於任那詔大伴金村大連遣其子磐與狹手彦以助任那 同十九欽明天皇云二十三年八月天皇遣大將軍大伴連狹手彦領兵數万伐于高麗狹手彦乃用百濟計打破高麗ノ

帳然 なけくこと

黯然ハ默然モノイハヌ也

筑前國司山上憶良謹上

詠領巾麾嶺歌一首并序

山上臣憶良

大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國艤棹言歸稍赴蒼波妾也松浦佐用嬪面嗟此別易歎彼會難即登高山之嶺遥望離去之船悵然斷肝黯然銷魂遂脱領巾麾之傍者莫不流涕因號此山曰領巾麾之嶺也乃

作歌曰

得保郡等 紫 胡比 比例布利之 夜麻

とほつひとまつらさよひめつまこひに
ひれふりしよりおへるやまの名

領巾 仙曰遊仙窟註曰領巾悵子也罩曰領巾狹曰悵子也春著領巾秋著悵子婦人頭餝也こく装束師乃家ニ爲しうハ当时も五節乃舞妓ハ裙帯領巾のくゝ身をかさるゝ物也袖穴ハ服るものゝ也又曰ひれ或ハ肩巾領巾もひれとよむ肩にかくるゆへ也

とほつ人まつらさよ姫をほ人ハまつとさりん飄須也 仙曰肥前國風土記曰松浦縣東卅里有悵揺岑寂頂有沼計可半町俗傳云昔者檜前天皇之世遣紗手比古領任那國于時奉命經過此墟於是篠原村有娘子名曰乙等比賣容貌端正孤爲國色紗手比古便娉成婚離別之日乙等比賣登此嶺擧帔招因

後人追和歌一首 姓名未詳

伊賓都婆等可取

やまなみこえてゆけばうらとさよいめろ
このやまのへにひまをみりくん

最後ノ人追和歌一首

姓名未詳

都婆

詩龍多氣

ふるさとにもちかへりてもみたまほしふ
ゆきふかきやまのしらゆき

最最後人追和歌二首

姓名未詳

布祢

宇奈波良

うなばらのおきゆくふねをやまのへの
比礼布良斯家武

ひまよりみつつくんまつくさよひめ

書殿餞酒日倭歌四首

作者未詳

布利等騰尾加弥

古保斯苦

ゆくふねをみりとりみりねいりてうら
こがくくうちくんまつくさよ姫

阿麻等夫夜 等利

義夜故

うちよするやつみもりとりてやこもりて
拳遠志 氏等比 可繋流 母能

をちかへりまをてらくりつるもの
比等母祢能 宇良夫礼

ひらもねろうらふまをそもよ
義麻知可豆加婆 和周良 志 奈半迦

みまもりつくいわすくんりもの
伊比都都母 能智

いひしものちこうまめらのまくや
佐夫志 計米夜母 吉美

さみけめやもまきみいまさまして

とゝふとハ恨みなる事にて
也 八雲抄云らし事一品住
つゝ云抄云いなからけふ之
恨するらし 王云冥会

余呂豆 余尓 伊麻志多麻比提 麻乎志 多麻波祢

よろづよにいましたまひてあめのした
まをしたまはねみかどさらずて

みやこちかくつかへこそ侍るものゝ沈みすてしまへハ忘れらるゝかと恨るゝり
王案猿乃人の名抄を見てこまれる人ハ尋ねをあさき恨るり 仙覺
乃人ハ竜田山をこえるる道にて景を尉て何とも忘んかと同
いはくものゝあこうてるめ 仙覺ハこの事しきとハ敢ちまうかさむりのん
さる敢ニハ侍るり不叶くる書殿あるも 王案さひしのんといふつゝも君
ハまことにまことにいひつくりと一説このあくもハ之云くもしむ在訳を
おろかにいはしかひて何ゆへのこうさゆのなしまつねとハ奥乃も天乃下登
あかしとかる世に同 万代おりいまて帝乃治をハさくすきて天下の
事なとト上アカしまへ之振形乃のうしに祝言をよめるなるや
敢布私懐一 敢乃字
聊乃字か有り作る

敢布私懐歌三首 天平二年十二月六日作
筑前國司山上憶良

何ゆきくるひろま
八雲抄ニ後成抄云能乃
てふり能のみやま
とそり 童蒙抄 殿跡同訓

阿麻社迦留 比奈尓 伊都等世 周麻比都々 美夜故能提夫利 和周良延尓家利

あまざかるひなにいつとせすまひつゝみやこのてぶりわすらえにけり 古来風体 わすれにけり

中抄と同いあまとハそるうちあるひなりやとく仙曰受領乃一任ハ四年也
六年主令ハ四ケ年也 是ハ侍らしあれハ六ケ年ありへぬれハひなに五
年すまひ侍ることよめる也 王案此仙説不審し 續日本紀天平寶字二年
十月勅頃年國司交替皆以四年為限 又同紀曰寶亀十一年八月太政
官奏筑紫太宰遠居邊要官人相賛限以四年於事商量甚不穩
便臣等望請官人歴任增為五年 暑註これハ統監ためし大宰ニ
五年これハ四年也こられとも良吏ハ延任とて四ケ年をかさねね
例あれとも何れハいまにみ年ハ延任あるへし是仁明天皇承和に
陸奥出羽太宰ハ任限六年あれハ四年と定らましと此事集もよう
侍のもし仙説めす

かくのみやいきつきき

加久能未夜 伊吉豆伎遠良牟 阿良多麻能

かくのみやいきつきをらんあらたまの

882

吉倍由久等志乃可伎利斯良受提
きへゆくとしのかきりしらすて

阿我農斯能 美多麻多麻比弖 波流佐良婆 奈良能美夜故爾 咩佐宜多麻波祢
わかぬしのみたまたまひてはるさらは
ならのみやこにめさけたまはね

凡安云作しむのさし
ゆく年とハ路る花年
乃けらく乃し万葉古
事記尾張国美夜受(ミヤス)
比賣哥ニ路る花月ハ
隠ゆくとも云り哥心ハ隠るとの事の限あれはかく長つき哉とてのこゝろなるへし
作りのし乃みゆる 凡安云作りのしハ我主乃帝王と[illegible]
おしまひくハ宣旨をかゝけてしめされけれはめしあけられんこと
を仙旨作りのし乃とハ我ねしのとりて以ハ父母なといふもし
子すまひくとハ先霊をたまふハ一[illegible]二つ[illegible]父母[illegible]
あれ[illegible]あまし一品[illegible]人乃忌日七月盂蘭盆十二月晦日
や[illegible]作り子られ[illegible]十二月乃霊供[illegible]
とき[illegible]
子[illegible]ハ[illegible]
こゝれ[illegible]ハ奥儀[illegible]頼乃字恩頼[illegible]月[illegible]紀[illegible]
切[illegible]凡安と仙[illegible]ハ[illegible]各別[illegible]凡安[illegible]

883

後追和松浦佐用嬪面歌一首
三島王

於登尓吉伎 目尓波伊麻太見受 佐容比賣我 必礼布理伎等敷 吉民萬通良楊満
おとにきゝめにはいまたみすさよひめかひれふりきとふきみまつらやま

おとにきてめ[illegible]
いまたきゝ[illegible]とハ領
巾振しこいふやきみまつ
らやまハ佐提彦をまよ
姫のまら心を添て詠之

884

為大伴君熊凝述志歌二首
大典麻田連陽春

國遠伎 路乃長手遠 意保々斯久 計布夜須疑南 己等騰比母奈久
くにとほきみちのなかてをおほゝしくけふやすきなんことゝひもなく

大伴君熊凝 大伴君ハ
姓尸也熊凝ハ名なり
こ[illegible]ハ[illegible]乃
憶良乃序よ見ゆ
[illegible]
[illegible]相撲使ふて
上京乃[illegible]死
[illegible]
擬て詠るを凡安云[illegible]
[illegible]

885

朝露乃 既夜須伎我身 比等國尓 須疑加弖奴可母 意夜能目遠保利
あさつゆのけやすきわかみひとくにゝすきかてぬかもおやのめをほり

玉桑おほ〳〵志〳〵おほ〳〵志〳〵妣乃美許等乃
道乃母岐乎波之利弖父母乎波布利弖
多礼加阿夜米志弖 仙曰いとかしこき他国の
空にても父母を思ふ心は誰も同じ事なれど
別て我が妣を恋ふる事の切なるは他国
なるが故なり 欲乃字をほりと訓ること
如何 多礼加阿夜米志弖 誰かあやめし
てぞ 阿夜米志弖 あやまちしてぞ

和為態凝述志歌一首并短歌并序

筑前國守山上憶良

大伴君熊凝者肥後國益城郡人也
年十八歳以天平三年六月十七日
為相撲使某國司官位姓名従人参
向京都為天不幸在路獲疾即於安
藝國佐伯郡高庭驛家身故也臨
終之時長歎息曰傳聞假合之身
易滅泡沫之命難駐所以千聖已
去百賢不留況乎凡愚微者何能
逃避但我老親並在菴室待我過
日自有偕心之恨望我還時必致
喪明之泣哀哉我父痛哉我母不
惠一身向死之途唯悲二親在生
之苦今日長別何也得覲乃作歌
六首而死其歌曰

人之生凝ぶ成りけり
不幸 論語ニ不幸短命而死ト云ヘリ
假合之身 仙曰人の身、四大和合して假の所
成し四大とは地水火風也人の身ふうるほひ
あるは水大也あたゝかなるは火大也いきの出
入するは風大也身の動するは地大也四大のより
合ふ事これは假合之身とこゝに云へり離散す
ることは無滅と云へり

喪明 礼記檀弓上曰子
夏喪其子而喪其明
註以哭甚故喪明也

宇知比佐受宮

宮のうち
波波

うちひさす 宮のうち
斯良奴 國

とこしへに 見れど飽かぬ
常 意久

かも 都しみれば
迦 百 重山 越

山も 川も 隔りて
京師 氏

遠くも 来にけるかも
意乃何身 志

かくしあれこそ
玉 鉾乃 道

大夫の 心振り起し
久麻尾介 久疑

剣大刀 腰に取り佩き
志波 等 計自母能

ますらをの 伊
宇知許伊

伊奴 能
國 尓阿良婆 父 刀利 奉

時母能 道
麻之 家尓阿良婆 母 刀利 奉麻志

ますらをの 仙宮君の
うけ賜はる 命の
畏けば 妻の
ひぬ 言ふ
てとよそひ
おこたるなこと
よのあらし
わ
仙宮人乃や
反歌
多良知乃母
いつもむきてら
道乃長手
いつかゆんかも
阿我
可利
いふかゆんかも

世間
時母能 道
伊奴 能
阿我 目
久礼等
久礼等
可利

乃有る代ゐ借代の字旧事記て読しィかれいハ餉カケとこゝハ河すて母ごうこハもゑハ母うわそまりいてるハ内うわハてあつふ心をの一

いてゆき日を経つ
ハをまちてハ吾を待んごとをそくとも父母等者しゝ物を我放ふをゐて祈りハ日をかさねて我と待らんと祝めし心をいとゝうるはみて

家尓阿利伎波波何
へゐあて母うりえをくさしる
こゝろハあらそ志ねろ一云のゝ
由伎期日平可倍聞都々家布々々等
てゆき日とかうく久ゐと阿来
ハをまちますんち知と波々良波母
一云ま〻つかさ
一世尓波二遍差延農
いとよろハみてゐてねちくをを
をまくやるくうわるまちん阿我和加礼南
一云あひ刊るまちん南

貧窮ノ歌一首并短歌 イ貧窮問答歌ヒングノ

山上憶良

風雑イまじ雨布流欲乃雨雑イまじ
かせまじ雪布流欲波為部毛奈久寒之安礼
ゆきまじ堅塩乎取都豆之呂比
ゐまろ鼻乎宇知須々呂比之波奈之
湯酒乎宇知須須呂比之波奈之
うちすゝろひて志ぶ可波
仙ひじ之眤之尓志可登阿良農比宜可伎
鼻眤ちひしろひ安礼乎於伎良比人者安良自等
撫而あまををきて人ハ
冨己呂倍騰寒之安礼婆麻被
引可賀布利布可多衣
ひきかうふりぬのゝきぬありの
許等其等伎曽倍騰毛寒夜須良
こゝろゐきよろもさむよすら
乎和礼欲利毗貧人乃父
をわれをりをひちゝ

ひとつになし八助字也
かこちあかね 仙曰かなしも
老乃はてもむよしと云
心よくも何かね云ぞ
かころつて わかれすもし
ひきかへ らり 仙曰ふかふ
アこゝかかりと云
始めの八許乃助
なよびきかきれ也
ぬのかたきぬ 布乃肩
八かりかきるやうなる
ありのごとく 仙云何る跟
ことく見えても
わゝけちる方の垂れ垂き
こりふ也
人皆か 皆人からある

ひ我のかくうきを云
わくらはに 仙曰たまさか也
和久良婆尓 邂逅人なりたまさか
ふるのこと 八遅旅云
海松乃やうに破てし
可ゝ布ゝ八つれの名
とふをも八遅 又胸
ちけさかれる 私ニ氣
イ和ゝ氣ト安云わけ
さかれる八破れたり
ありすりさげけ垂也
ふせいほ 伏屋の類也
仙曰斯ふとして
かきひきまる屋
又安云 斯の伏まつ
まけいほまげ屋也

母波 飢寒 良年 妻子等波
ちゝはゝうゑさむからん めこどもは
乞泣 良牟 此時者 伊可尓之都々可
こひてなくらん 此時は いかにしつゝか
汝代者 和多流 天地者 比呂之等
なかよはわたる あめつちは ひろしと
伊倍杼 安我多米波 狭也 奈里奴流
いへど あがためは せばくや なりぬる
日月波 安可之等伊倍騰 安我多米波
日月は あかしといへど あがためは
照 哉多麻波奴 人皆可 吾耳也
てりやたまはぬ 人みなか われのみや
之可流 和久良婆尓 比等々波 安流乎
しかる わくらばに 人とはあるを
比等奈美尓 安礼母作乎 綿毛奈伎
ひとなみに あれもつくるを 綿もなき
布可多衣乃 美留乃其等 和々氣佐我礼流
ぬのかたぎぬの みるのごと わゝけさがれる
可可布能尾 肩尓打懸
かゝふのみ かたにうちかけ

布勢伊保能 麻宜伊保乃内尓 直
ふせいほの まげいほのうちに ひた
土尓 藁解敷而 父母波
つちに わらときしきて ちゝはゝは
枕乃可多尓 妻子等母波 足乃方尓
まくらのかたに めこどもは あとのかたに
圍居而 憂吟 可麻度柔播
かくみゐて うれへさまよひ かまどには
火氣布伎多弖受 許之伎尓波 久毛能
ほけふきたてず こしきには くものす
須可伎弖 飯炊 事毛和須礼提
すかきて いひかしく ことも忘れて
奴延鳥乃 能杼与比居尓 伊等乃伎提
ぬえどりの のどよひをるに いとのきて
短物乎 端伎流等 云之如
みじかきものを はしきると いふがごと
楚取 五十戸等我 許恵波 寝屋度麻弖
く 楚取 さとをさがこゑは ねやどまで
來立 呼比奴 可久波可里 須部
きたちよばひぬ かくばかり すべ

奈良物能可　世間道
なぎさのり　よもなかりのみち

又歌

世間非常之等夜佐之等於母倍利母
世乃奈可乎　宇良夜須之等　夜佐之等於母倍利
飛立可称都鳥　尓之安良祢婆
宇良夜須之等母　奈久祢之麻左牟

茨末三甕中生塵范史雲云范冊ノ負書ヲ
ねく多のの野のごとく　仙ねし多ハ怪島也野
楚取　山本ハ人ノ字ヲ取ルヲ点ス足安ニハ人ノ字ヲ訓スル本好シ
仙ハ山ノ字ヲ訓ス仙ハ山ノ字ヲ訓スル本好シ
ねやとよもして　薬園のかと勢の幸まして
ありすへき事ハ　やさしと　饗乃字ヲ負ヲ礼ヲ饗ト云
世をうし　饗ヲ　俗ニ　ハヤシ　ヲ　ねと

贈大唐大使卿記室好去好来歌一首
并短歌　天平五年三月一日良
宅對面獻三日謹上

山上憶良

神代欲理　云伝
神代より　いひつがひけり　そらみつ
倭國者　皇神能　伊都久志吉國
やまとの国ハ　すへ神の　いつくしき国
言霊能　佐吉播布國等　加多利継
ことたまの　さきはふくにと　かたりつき
伊比都賀比計理　今世能　人母許等期等
いひつがひけり　今の世の　人も許等期等
目前尓　見在知在
めの前に　見ある知ある
人佐播尓
満区播阿礼等母　高光
みちさはに　あれともあれと　ひかる日の
御朝庭　神奈我良　愛能盛尓
御朝廷　神ながら　めくみの盛に

好去好来歌　一首
きこしめす　天の下　四方の国には
山河を　広み尊み　百足らず
八十の伴の緒　心尽し　て
仕へ奉るを　事と言挙げせぬ
国ながら　しかれとも
大御言を　かしこみ聞きて
天地の　神を祈り　て
幸くあらむと　斎ひ来る
四つの船　船の舳に　道速振る
荒き御魂を　和き御魂を　相船の
むた　むた　と　率ひ給ひ
天地の　大御神等の　大御手に
抱き持たされ　ま幸くませと
恐み　恐み　も　白し給はく
大君の　遠の朝廷と　しらさるる
国の大神　大伴の　御津の浜より
大船に　真楫繁貫き　白浪の
高き荒海を　おし渡り
ここ思へば　ここも我が国
神ながら　しかれとも
斎ひ奉れる　神ならば
大伴の　御津の浜に　直向ふ
敏馬の浦の　沖辺には
深き海原　潮騒の　八重波越えて
辺つ辺に　波立ち来寄る
辺つ辺に　白波騒き
あり立ちの　この浜松の
根を枕き　荒き島廻に
いほりして　波の音を聞けば
世間の　憂けくもあるか
波の音の　繁き浜辺を
行き廻り　見れども飽かず
百重なす　心は思へど
大船の　行きのまにまに
ますらをの　手結ひ交へて
かき撫でて　我を労はり
真幸くと　言ひし言葉の
下延へて　我が思へらく
大船の　頼める時に
いつしかも　日の経ぬれと
あらたまの　月の来経れば
春花の　うつろふまでに
相見ねば　いぶせくもあるか
梅の花　咲きたる園に
うぐひすの　来鳴く春べと
なりぬれば　我が待つ時に
ほととぎす　いち早く来鳴き
あやめ草　花橘を
玉に貫き　かづらにせむと
九重に　にほはす時の
あらまくを　ほしき我が門
立ち潜き　鳴き響もせ
ひぐらしの　来鳴く秋の
夕されば　雁を数へつつ
萩の花　尾花が末の
生ひ靡き　うら悲しきに
八重葎　茂れる宿は
雪消して　出で来る水の
ゆくへなみ　嘆きつつ
春日を恋ひ　山を越え野を行き
鳥じもの　朝立ち行きて
夕されば　野宿をすらし
古衣　真土山を
夜昼と　わかず越えて
大野らの　風を時じみ
吹く雨の　間なくしきれば
思ふどち　行けども行けど
恋ふる日の　いやしけ増しに
あしひきの　山きへなして
高波の　しくしく来寄る
海原の　奥を深めて
神代より　言ひ継ぎ来れる
神ながら　しかれとも
大君の　命恐み
四つの船　船の舳並べて
ま幸くと　聞こえ来る
荒き御魂を　和き御魂を　相船の
むた　むた　と　率ひ給ひ
天地の　大御神等の　大御手に
抱き持たされ　ま幸くませと
恐み　恐み　も　白し給はく
大君の　遠の朝廷と　しらさるる
国の大神　大伴の　御津の浜より
大船に　真楫繁貫き　白浪の
高き荒海を　おし渡り
ここ思へば　ここも我が国
神ながら　しかれとも
斎ひ奉れる　神ならば
大伴の　御津の浜に　直向ふ
敏馬の浦の　沖辺には
深き海原　潮騒の　八重波越えて
辺つ辺に　波立ち来寄る
辺つ辺に　白波騒き
あり立ちの　この浜松の
根を枕き　荒き島廻に
いほりして　波の音を聞けば
世間の　憂けくもあるか
波の音の　繁き浜辺を
行き廻り　見れども飽かず
百重なす　心は思へど
大船の　行きのまにまに
ますらをの　手結ひ交へて
かき撫でて　我を労はり
真幸くと　言ひし言葉の
下延へて　我が思へらく
大船の　頼める時に
いつしかも　日の経ぬれと
あらたまの　月の来経れば
春花の　うつろふまでに
相見ねば　いぶせくもあるか
梅の花　咲きたる園に
うぐひすの　来鳴く春べと
なりぬれば　我が待つ時に
ほととぎす　いち早く来鳴き
あやめ草　花橘を
玉に貫き　かづらにせむと
九重に　にほはす時の
あらまくを　ほしき我が門
立ち潜き　鳴き響もせ
ひぐらしの　来鳴く秋の
夕されば　雁を数へつつ
萩の花　尾花が末の
生ひ靡き　うら悲しきに
八重葎　茂れる宿は
雪消して　出で来る水の
ゆくへなみ　嘆きつつ
春日を恋ひ　山を越え野を行き
鳥じもの　朝立ち行きて
夕されば　野宿をすらし
古衣　真土山を
夜昼と　わかず越えて
大野らの　風を時じみ
吹く雨の　間なくしきれば
思ふどち　行けども行けど
恋ふる日の　いやしけ増しに
あしひきの　山きへなして
高波の　しくしく来寄る
海原の　奥を深めて
神代より　言ひ継ぎ来れる

反歌

大伴 御津 松原 可吉 掃 氐
おほともの みつのまつばら かきそきて
和礼 立 速 歸 坐勢
われまちかねむ はやかへりませ

難波津尓美 船 泊 農等 吉許延 許婆
なにはつにみふね とまりのと きこえこば
紙 解 佐。氣 氏 多知 婆志利勢武
しとどさけさけむ まちかねにせん

況痾自哀文

山上憶良

惟時七十有四 鬢髮班白筋力怯羸
不但年之老復加斯病諺曰痛瘡灌鹽
短材截端此之謂也四支不動百節
皆疼身體太重猶負鈞石懸布欲立
如折翼之鳥倚杖且歩比跛足之驢
吾以身已穿俗心亦累塵欲知禍之
所伏崇之所隱願割刳五藏刋採百
病尋逆膏盲之隙處欲顯二豎之逃
匿

年齡 但此文作六
籠以二竹反一 本作二竹反一
意明白 首尾 欲 鈞石 一鈞四鈞 為一石合一百廿斤也
為二鈞四鈞一 吾以身已穿俗心亦累塵 割刳五藏 割刳 割心腸 華陀
結積 病者 膏肓 膏

尋逢膏盲之隩處仙曰二豎已入晉乃景公疾走求醫療治未瘳醫緩秦乃醫緩を召くに未せんとの告ありて醫緩已に至る二人乃わくありて一人の云明日醫緩きたらば必ず居ぐへうすとのみ今一人乃云いかにも醫緩きたらば膏盲乃わくまに入ぬ是ハ以て治をうべきの醫緩景公ありて疾治して膏肓に入て鍼も灸もとゞかざるところ也と云ことなり或本二此話あり余根既盡當乃沈あり此本かなり人情ありく世無恒質世興ハ常住乃すべからく人命ハ窓期なりとし但或本三此文乃なし

窮以釋慈之示教先開三歸五戒而化法界周孔之垂訓前張三綱五教以齊濟郡國故知引導雖二得悟惟一也但以一如此の文乃ごとく釋慈ハ釋迦と慈尊とし三歸ハ佛法僧ゟ始て五戒ハ不殺生不偷盜乃ごとく周孔ハ周公旦孔子心三綱ハ君ゟ父子夫婦ゟ五教ハ父義母慈兄友弟順子孝をいふことく然らば本故乃ごとくなりそうそうりそうそうり

白駒黃泉おりそうそうり注

空掛信劍死ぼ乃ち向れりといふ心し史記曰吳季札使北過徐君徐君好季札劍口弗敢言季札心知之為使上國未獻還至徐徐君已死乃解其寶劍係徐君冢樹而去

野中白楊文選古詩云古墓犁為田松柏摧為薪白楊悲風多上下皆

歎假合即離易去難留詩一首并序　山上臣憶良

世無恒質所以陵谷更變人無定期所以壽夭不同擊目之間百齡已盡申臂之頃千代亦空且作席

上之主夕為泉下之客白駒走來黃泉何及隴上青松空掛信劍野中白楊但吹悲風是知世俗本無隱遁之室原野唯有長夜之墓先聖已去後賢不留如有贖而可免者古人誰無價金乎未聞獨存遂見世終者況乎縱覽始終之恒數何慮存亡之大期者

世終者（本ヨリ）所以維摩大士疾（玉體）于方丈釋迦能仁掩金容于双樹内教曰不欲黒闇之後來（其人）徳天之先至故知生必有死死若不欲不如不生況乎一（本ニ）とあり能仁八迦迦乃ち掩金容于双樹ニ（本ニ）入滅（本ニ）ものゝ金色乃身を遮羅双樹ニおほひ（本ニ）かくし入滅（本ニ）ものゝ黒闇八死也徳天八生也死乃ちまことの生ニ（本ニ）つくものの也

世道変化 そこを詩也

うき世の常ならぬ

人事経紀 年月のうつる也

賈誼傳ニ立経陳紀（ヒサシクノコリヤスキコト）

あきらかなる内の如きハ（本ニ）

惑本註ニ謂瞻浮洲人壽一百二十年也（本ニ）

山南引乃人の寿命の数

ひさしからぬ命ハ（本ニ）

世道變化（ニケ）猶擊（第）月（ノ）人事（ノ）經紀（如）申（臂）（ノ）（ヒ）

空與浮雲行大虚（ニ）心力共盡無所（ヨ）寄（ル）（ト）

老病經（ヘテ）年思（フコ）兒（ラ）等歌七首

天平五年六月（ノ）丙申（ノ）朔戊戌作之

山上臣憶良

靈（ノ）（ト）

内（ノ）限（リ）者平（ラケク）氣久

安久（ク）阿良（ラ）遠事（ヲ）無（ク）常（ノ）

やすくとのんとこもなく

阿良（ラ）遠世間（ノ）能宇計久都良計久

いつをよそかとうけくらく

伊等能伎提痛伎瘡尓波醯（ノ）鹽（ノ）平

いとのきてくるまひかしまを

灌知布何其等久益（ス）母重

そくちふ馬荷尓表荷打等伊布許等

ときこむまでうちのかしこまりて

能其等老伎阿留我身上尓病

乃ことをおもてあるわれ乃のみ

遠等乃加伎之阿礼婆晝波母歎加比

をとくしつゝあれハ

久良志夜波母息豆伎阿可志年

長久夜奈志渡礼婆月累憂

吟比許等ニ波斯奈々等思騰

五月蠅奈周佐和久兒等遠宇都氏

さくなすさくなすうつて

ようて 病とのうわと
いもせ ことと病と不脫の
ほしみせ 本の兵やま
ひとことようて
いまいとまきまき 仍月之 いてくいてくいての 思 この子助かれ ことと
大今集 もいる人 去れぬまひ あること芒種乃 もちろれう 逢うのまき
あけうひて あけき幸 ひるなよいものもいかも 思 やうのーも同
こころぐい 事乃如くいと 重病ふと 聞てまいまうつるの如くに 己が死ぬんと思ふ
こと 古今六帖 死ぬんこと いう 詞

さことへまます 哀乃 繩のやうかにくくあうもと
うつてい 足安云 甘精て 仙日うつうもしてくいて 又同内 お通也 と
玉葉 乃そくまもも 甘精て 死ぬんひます 心みくいまうと 我との 深
てかくいつまうもそうてまいて 死ぬんこと ひとまます かい心 はねと
仙初の心いまもうつうと 思又い 死ぬんねいまうと 千万 いてくいて 死ぬん
るかやもりすと 心いもえねい心もはねと 思 いて 助なまうり
ふりくふ 足安云 ふりくふや おのこーまの 仙日初の子助かくこと 思

反歌

奈具祇 年留心波奈之 尓 雲 隱
鳴 往 鳥 乃 林能尾志 奈可由
可久 可久 可久 尓 思和豆良比 林能尾志 奈可由
周 弊毛奈久 苦 志久 阿礼婆 由波之利
伊奈々等 思 騰 許豆 尓 作波 利奴
留 人能家 能 子等 能 伎留 身奈 奈久
久多志 須都良 年 綿 良波毛
鹿鹿 妙 能 布 衣 遠陀 尓 伎世 難 尓
可久 波 數 数 世 年 周弊遠奈 美
水沫 奈 須 徴 傘 毛 拷 繩 能
也 家のまもの 菜

千尋尓母何等慕久良志都
ちひろにもねかひくらしつ

倭文手纏數母不在身尓波在等
しつたまきかすにもあらぬみにはあれと
千年尓母可等意母保由留加母
ちとせにもかとおもほゆるかも

此一首神亀二年雖作之更載茲

戀古（男兒）日之名歌三首　長一首　短二首

山上臣憶良

世人之貴慕七種之
よの人のたふとびねかふなゝくさの
寶毛我波何為和我中能
たからもわれはなにゝせんわかなかの
産礼出有白玉之吾子古日者
うまれいてたるしらたまのわかこふるひは
明星之開朝者敷多倍乃
あかほしのあくるあしたはしきたへの

纒みおもひて見る多
栄と称しなとん絢綿
なるもと云我子にえせ
ときに心を含めりかさ
しいさうしと
ゆくへのぬのきぬを
兄安云ゆくゆきき布
衣をと玉乗きせりて
いまゆりまきとこ云へ
なの古乃錦きぬと読凡
みなしなすしろき金
佃日なの淡なまし玉乗
よろいしる魂とす
形の枕絹かもえふも
さ病の身もせ余と殿さ
玉つしまきき玉もし

登許能邊佐良受立礼杼毛居礼杼毛登母尓
とこのへさらすたてれともをれともともに
戯礼夕星乃由布弊尓奈礼波
たはふれゆふつゝのゆふへになれは
伊射祢余登手乎多豆佐波里父母毛
いさねよとてをたつさはりちゝはゝも
表者奈佐我利三枝之中尓乎祢牟登
うへはなさかりさきくさの中にをねむと
愛久志我可多良倍婆何時可毛
うつくしくしかかたらへはいつしかも
比等々奈理伊弖天安志家口毛與家久母
ひとゝなりいてゝあしけくもよけくも
見武登大船乃於毛比多能無尓
見むとおほふねのおもひたのむに
於毛波奴尓横風乃爾母布敷可尓
おもはぬによこしまかせのにふふかに
覆來礼婆世武須便乃多杼伎乎
おほひきぬれはせんすへのたときを
志良尓志路多倍乃多須吉乎可氣
しらにしろたへのたすきをかけて

志つましさいなそうね
男といりんそてかこ注
ありきれとりて兄安七寶
也金銀瑠璃車渠
馬瑙珊瑚琥珀也
白玉の子といひてさ
ゆうり明星明るの枕詞
こころへもうす御床上
ゆふ星の庚星と古夕に出
うへはなさかり兄安云
まへ禰ぢとさうる玉
葉上へわかれの也あさ
かりいをさくねとりに
乃根也棚らなとり
きとせなる棚と云ゆ如し
さきさくれ中にを兄安

云ク父母の守ふれ神ふれハミツあれいこ枝のすふこと云ヒ玉葉ニ枝こうふる枝あるこハ花をこ咲ス横風乃願母布敷可爾或ハよこうせのすちくふ乙安云やこ風ハこひのおれるとよちくこ生ゆりこと玉葉船よ横風の頻るこくく病のおりやちやこのすきを

白綿こすきるこひの午祈こ日本紀ニからもりもりも

麻蘇鏡 盛ル登刺毛知氐天神阿布義詠此乃義地祇布之氐可良受毛可賀刺毛神乃末額衣ねりしきかちすも口なもしかのま尓麻尓等立阿射里我例乞能米登よたてこ須史毛余家久波奈之尓漸く

伊布許等可多知都父保利朝伊乃知多延奴礼夜麻よこ霊尅立平村利足須里佗家婢伏御武林宇知奈氣吉手尓持流安我古登波之都之道世間

此一首作者未詳以松山上之操載焉

操劉向別録曰其道周塞悲愁而作者名其曹操言遇受害不失其操也

貞享二年七月七日染筆于新玉津嶋菴下而八月五日書此一巻已了